

【原著】

課題目的の共有と関係継続性が協調意図に及ぼす影響

— ペアワーク課題のシナリオを用いた検討 —^{1,2}

田 中 知 恵 (明治学院大学心理学部)

要 約

課題目的の共有とチームとしての関係継続性が課題遂行の協調意図に及ぼす影響について検討した。実験では大学生参加者 ($n=123$) に対し、授業課題としてペアで発表を行う場面を想像させた。その際、発表における自分の目的 (わかりやすさ・うけをねらう) と相手の目的 (わかりやすさ・うけをねらう)、関係継続性をシナリオにより操作した。そして事前準備段階における協調意図 (e.g., 自主的に発表のリハーサルを行う)、相互作用段階における協調意図 (e.g., 計画がうまくいかない場合に何ができるか考える) を測定した。その結果、関係が継続する場合、発表課題に対して“うけをねらう”目的が共有されていると事前の資料準備における協調意図が他の条件と比較して高いことが示された。チームで課題目的を共有する意義として、メンバー間の協調を高める可能性について考察された。

キーワード：課題目的の共有、関係継続性、協調意図

問 題

本研究の目的

チームメンバーが協働して課題を遂行する際には、多くのことを共有する必要がある。田中 (2023) はこの点について次のように整理している。どのように課題を達成するのかということに関する“達成方法”の共有、どの領域を誰が担当し責任を持つかということに関する“役割体制”の共有、どの情報がどこにあるかということに関

する“情報分布”の共有、どの方法を用いて情報を伝えるかということに関する“伝達方法”の共有、どのような効力感や達成感、また相互信頼感があるかということに関する“感情”の共有、そして課題によってどのようなことが成し遂げられるかということに関する“目標”の共有である。

上記のさまざまな事項の共有に関する考え方は、他の研究者の見地とも共通する部分がある。たとえば山口 (2020) は目標の共有がチームワークにおける助け合いの質を変化させるため“チームワークを成功に導く鍵を握るプロセスである” (p.443) と論じている。

またチームプロセスの分類を行った Marks et al. (2001) はミッション分析や目標同定、戦略策定に関する“設定プロセス”、目標遂行・システム・チームのモニタリングや協働に関する“行為

1 本研究は著者が指導した竹森俊輔氏の卒業論文研究 (2022年度明治学院大学) のデータを本人の了承を得たうえで再分析したものである。

2 本研究の一部は産業・組織心理学会第38回大会にて発表された。

プロセス”，コンフリクト調整や動機・効力感構築，感情管理に関わる“対人間プロセス”があることを論じている（Marks et al., 2001, p. 363 Table 1）。この理論における“設定プロセス”は，先に挙げた“目標”の共有，“行為プロセス”は“達成方法”の共有，“対人間プロセス”は“感情”の共有と共通する部分があると考えられる。

Kozlowski & Ilgen (2006) はチームの認知プロセスとして，組織の状況や環境に関する解釈である“ユニットやチームの風土”，チーム内で共有された知識構造である“チームメンタルモデル”とチーム内の情報知識分布である“トランザクティブメモリ”，そして相互依存的な知識・スキル・遂行能力の獲得である“チーム学習”を挙げている。この理論は組織における認知に注目したものであり，“チームメンタルモデル”・“トランザクティブメモリ”は田中（2023）における“情報分布”の共有と共通すると考えられる。

課題目的の共有

このように，チームにおける課題遂行のプロセスや内容は組織心理学における複数の理論のなかで論じられてきた。しかしながら，これまでの研究において明示的に取り上げられていない概念がある。それは課題を何のために達成するのかという“課題目的”の共有である（田中，2023）。たとえば，組織に新商品開発という目標がある場合，同じ目標でも状況によってその目的は異なる可能性がある。新たなターゲットの取り込みを目的とした新商品開発，市場における自社のシェア拡大を目的とした新商品開発，あるいは，すでにある商品の改良を目的とした新商品開発などというように，さまざまな課題目的が存在する。しかしながら，こうした“課題目的”の共有がどのようにメンバー間の協調につながっているのか実証的に検討した研究は見当たらない。そこで本研究ではこの点に注目するとともに，その効果を調整する要因について検討する。

関連する研究と未検討課題

本研究課題と関連する研究としては，次のものがある。チームメンバー間の知識の類似性（チームメンタルモデル）を検討した23研究に対するメタ分析では，知識内容の共有がチームパフォーマンスを予測することが見いだされた（DeChurch & Mesmer-Magnus, 2010）。また，大学ラグロス部の活動メンバーを参加者とした調査では，試合時の優先事項（e.g., 試合の展開に応じて適切な試合運びを行うこと）の順位がメンバーでどの程度共通しているかということと，チームのパフォーマンスが関連していた（池田，2012）。大学生の学園祭模擬店営業をテーマとして取り上げた調査でも，重要事項（e.g., コストの削減）の共有と目標達成の関連が見いだされている（秋保 et al., 2016）。

2人1組のチームを用いた研究では，コンピュータゲーム実施時におけるチームワークの側面を7つ取り上げ（e.g., 行為の協調），各側面の関連を各自に評定させた。すると，二者間における関連評定の一致度は，第三者によるチームプロセス評定（e.g., 協力の程度）を予測していた（Mathieu et al., 2000）。同様に2人1組のチームを用いた研究では，想定していた変数間の関連は認められなかったものの，迷路ボードを傾けてボールを進めるゲーム遂行時に各自が重視した事項（e.g., 的確な操作をすること）の評定一致度とゲーム結果との関係が検討された（秋保ほか，2018）。

しかしながら，これらの研究はいずれも目標達成のための知識や手続き，あるいは手段についてチームメンタルモデルという概念を用いて検討したものであり，先に述べたような課題目的の共有を扱ってはいない。また調査研究では変数間の因果関係を特定することができない。上記のMathieu et al (2000) は実験を行っているものの，検討されていた共有の対象はチームワークに対する認知である。秋保ほか（2018）も実験を行っているものの，ゲームの試行後に，遂行中に重視していた事項について評定を求めているため，パフォーマンスの結果によってその評定が影

響を受けている可能性がある。つまり測定された重視事項は、厳密にはパフォーマンスに対する原因とは言えないだろう。こうした背景に基づき、本研究ではこれらの先行研究では取り上げられてこなかった変数の働きについて検討するため、実験的に課題目的の共有を操作し、チームメンバーとの協調意図に及ぼす影響を検討する。

本研究の概要と予測

なお本研究ではリーダーが存在しない状況を設定する。リーダーが存在するチームの場合、課題目的はリーダーによりメンバーに対して提示される可能性がある。他方、社会にはリーダーを持たないチームも存在する。たとえば、先に挙げた Mathieu et al. (2000) や秋保ほか (2018) の研究でも、そうしたチームを扱っていた。リーダーを持たないチームの場合、課題目的の提示がなされずメンバーは各自の目的にそって課題遂行をする可能性がある。その際、メンバー間で課題目的が共有されている場合は、共有されていない場合よりも協調意図は高くなるだろう。本研究ではこの点について、2名で構成されるチームの課題を取り上げて検討する。

また、研究ではこの効果を調整する要因として、チームとしての関係継続性に注目する。組織ではさまざまな課題に取り組む必要がある。そのため、たとえば一つの部署においてもクライアントごとにチーム編成がなされる場合や、プロジェクトに合わせてチームが組み直される等、課題に応じてチームメンバーが変わる場合がある。メンバーとの協調意図は、課題目的が共有されていることに加えて、今後も同じチームでの活動が継続するときにもっとも高くなると思われる。

本研究の予測は次の通りである。課題目的が共有されている場合、共有されていない場合に比べてチームメンバーへの協調意図が高いだろう。この効果はチームとしての関係継続性がある場合により大きいだろう。

上記の予測について検討するために、複数の課題目的が想定される課題として、本研究の参加者である大学生にとってなじみのあるゼミ発表を取

り上げる。発表の成功という最終目標は同一であっても、成功の意味するものが異なれば、それに応じた課題目的が存在すると考えられる。この課題目的として扱う内容については予備調査を行い検討する。なお本研究では目的の共有されやすさの違いによって予測する効果に影響が生じるかについても探索的に検討する。そのため予備調査ではその点も考慮しつつ実験に用いる課題目的を選定することとした。

方法

予備調査 1

本実験で用いる課題目的を選定するために予備調査 1 を実施した。本実験の参加者と同じ大学にてゼミに所属している学生 9 名 (男性 2 名・女性 7 名) を調査対象とした³。参加者には“ゼミの発表において大事にしたいこと”に対し、相談しながら自由に項目を列挙することを依頼した。その結果、“内容の良さ”“成績で S 評価を取る”“わかりやすさ”“早く終わらせる”“うけをねらう”の 5 項目が参加者における理解しやすさの観点から選定された。

予備調査 2

予備調査 1 の結果に基づき、本実験で用いる課題目的を選定するために予備調査 2 を実施した。

本実験の参加者と同じ大学にてゼミに所属している学生 15 名 (男性 4 名・女性 11 名) を対象とした (平均年齢 20.53 歳, $SD=5.16$)。予備調査 1 で選定された 5 項目に対し、ゼミ発表に対する自分の考えにどの程度あてはまるか、それぞれ 7 件法 (全くあてはまらない - 非常によくあてはまる) で回答を求めた。

各項目の平均点を算出し、もっとも高い得点であった“わかりやすさ” ($M=5.06, SD=.507$) ともっとも低い得点であった“うけをねらう”

3 参加者は著者が指導するゼミの 4 年生であった。調査は研究に関する議論として実施されたため、年齢への回答はもとめなかった。

($M=3.67, SD=1.59$) を実験で用いる課題目的として選択した。これは先述した通り、目的の共有のされやすさの違いによって課題目的共有の効果に影響が生じるのか探索的に検討するためであった。なお“わかりやすさ”の平均値は尺度の中位点(4)よりも有意に高かった($t(14)=12.22, p<.001, d=.507$)。“うけをねらう”の平均値と尺度の中位点(4)には差が認められなかった($t(14)=.813, p=.215, ns$)。

本実験

実験デザイン

自分目的(わかりやすさ・うけをねらう)×相手目的(わかりやすさ・うけをねらう)×関係継続性(あり・なし)の参加者間要因計画であった。

実験参加者

大学生123名(男性33名・女性89名・無回答1名)であった(平均年齢20.94歳, $SD=.708$)。参加者は各条件にランダムに配置された。

手続き

Qualtricsを用いてオンライン実験を実施した。実験実施にあたっては参加者に対して回答は無記名で行うことや、回答が研究目的のみに使用されること、個人の回答がそのままの形で公開されない点など研究の説明をし、参加への同意を得たうえで研究の手続きを開始した。実験参加にかかる時間はおよそ5分であった。データ収集期間は2週間であった。

参加者には大学のゼミ場面として、同じゼミの学生(Aさん)と2人1組のペアになり、1か月後に論文の内容について発表をする状況を説明した。そしてシナリオを提示し、その状況を想像してもらうことで、関係継続性と課題目的の共有を操作した。その後、各自で発表の準備を行いつつ、1週間に1回行われるゼミ授業内で互いに話し合うことを想像してもらい、操作チェック項目ならびに従属変数への回答を求めた。

関係継続性の操作

半数の参加者には“あなたはペア相手のAさんに対して、ゼミの中でこれからも仲良くしたいと考えています”という説明を提示した(関係継続あり条件)。残り半数の参加者には“あなたとペア相手のAさんはたまたま席が隣で、あなたがペア相手のAさんと一緒に活動するのは今回だけです”という説明を提示した(関係継続なし条件)。

課題目的共有の操作

半数の参加者には“あなたは、前の週のグループがわかりやすい発表であったため、自分たちのグループもわかりやすさを大事にした発表にしようと思っています”という説明を提示した(自分目的わかりやすさ条件)。残り半数の参加者には“あなたは、前の週のグループが受けをねらったおもしろい発表であったため、自分たちのグループもうけをねらうことを大事にした発表にしようと思っています”という説明を提示した(自分目的うけをねらう条件)。

続けて“Aさんと挨拶をした後、以下のことを言われました”と説明し、半数の参加者にはペアのAさんの発言として“ペアのAさん：ゼミの発表ではみんなに理解してもらえるようにわかりやすさを大事にしたいんだよね”と提示した(相手目的わかりやすさ条件)。残り半数の参加者にはAさんの発言として“ペアのAさん：授業の発表ではみんなにおもしろい発表だと思って欲しいからうけをねらうことを大事にしたいんだよね”と提示した(相手目的うけをねらう条件)。

上記のように提示することで、どの条件においてもゼミ発表の成功という目標はあるものの、自分の目的と相手の目的が一致している場合は課題目的が共有されており、不一致な場合は課題目的が共有されていないことがわかるようになっていた。

操作チェック項目

自分の課題目的が正しく参加者に理解されていたか確認するため“あなたは発表で何を大事にし

たいと書かれていましたか”という質問に対し、“内容の良さ”“成績で最高評価を取る”“わかりやすさ”“早く終わらせる”“うけをねらう”のうち1項目を選択させた。実際の操作に用いた2項目以外にもフィルター項目として3項目を加えてたずねたのは、正しく理解していないにも関わらず偶然正答を選ぶという可能性を低めるためである。この質問に対し、操作された通りに正しく回答しなかった場合にはそこで実験が終了し先の従属変数への回答ができないようになっていた。

チームメイトである相手の課題目的が正しく理解されていたか確認するため“あなたのペアのAさんは発表で何を大事にしたいと言っていましたか”という質問に対し、上記と同様の5項目より1項目を選択させた。この質問に対しても操作された通りに正しく回答しなかった場合にはそこで実験が終了するようになっていた。

関係継続性について正しく理解されていたか確認するため“この発表が終わってからも、あなたはペアのAさんと一緒に活動する機会があると思いますか”という質問に対し“そう思う”“そう思わない”の2項目より1項目を選択させた。この質問に対しても、操作された通りに正しく回答しなかった場合にはそこで実験が終了するようになっていた。本研究ではこれらの操作チェック項目にすべて正しく回答した123名を実験参加者としてそのデータを分析に用いた⁴。

4 自分の課題目的の操作チェック項目に正しく回答できなかったのは、わかりやすさ条件2名・うけをねらう条件1名であった。相手の課題目的の操作チェックに正しく回答できなかったのはうけをねらう条件の4名であった。これらの7名を除き、各条件の参加者数は、関係継続なし・自分目的のわかりやすさ・相手目的のわかりやすさ条件が19名、関係継続あり・自分目的のわかりやすさ・相手目的のわかりやすさ条件が16名、関係継続なし・自分目的のわかりやすさ・相手目的のうけをねらう条件が12名、関係継続あり・自分目的のわかりやすさ・相手目的のうけをねらう条件が10名、関係継続なし・自分目的のうけをねらう・相手目的のわかりやすさ条件が18名、関係継続あり・自分目的のうけをねらう・相手目的のわかりやすさ条件が14名、関係継続

従属変数

準備段階における協調意図

次のゼミまでの1週間に、各自が行う準備段階での協調意図をたずねるため“あなたはAさんと会えない1週間の間でどの程度、発表の準備をしますか”という質問をした。そして“論文を理解できるまで読み込む”“発表のためのアイデアを考える”などの9項目に対し、それぞれ“全くあてはまらない-非常にあてはまる”の7件法で回答を求めた。これらの項目は本研究のため新たに作成したものであった。

相互作用段階における協調意図

ゼミの時間における相互作用段階での協調意図をたずねるため、“あなたはAさんと直接会って話せるゼミの時間でどのような行動をしますか”という質問をした。そして“良い発表にできるかについて様々な観点から話し合う”“お互い効率的に動いているかどうか議論する”“計画がうまくいかない場合に何ができるか考える”“準備がうまく行っているかどうか検討する”の4項目に対し、それぞれ“全くあてはまらない-非常にあてはまる”の7件法で回答を求めた。これらの項目は秋保たち(2016)の研究において、チームダイアログの指標として用いられていた項目を参考に作成したものであった⁵。

なし・自分目的のうけをねらう・相手目的のわかりやすさ条件が18名、関係継続あり・自分目的のうけをねらう・相手目的のうけをねらう条件が16名であった。なお、回答されない項目があった場合には、回答リクエストを設定しており参加者の回答に欠損値はなかった。

5 秋保ら(2016)の研究では、“私たちの団体メンバーは”を主語として、“目標の達成方法について様々な観点から話し合った”“お互いに効率的に働いているかどうかいつも議論した”“計画が上手くいかなかった場合に何ができるかを考えた”“仕事が上手く行っているかどうか再検討した”という項目が用いられている。

結果

分析はIBM SPSS Statistics 29.0を用いて行った。

準備段階協調意図

準備段階の協調意図をたずねた9項目に対し因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行ったところ，“論文を理解できるまで読み込む”“発表のためにアイデアを考える”“ペアのAさんに教えられるぐらいまで論文を読み込む”“ペアのAさんの進捗状況を想像しながら発表の準備をする”という4項目から成る論文読解，“パワーポイントの資料を時間をかけて作る”“発表の原稿を作る”“自主的に発表のリハーサルを行う”という3項目からなる発表準備，“ペアのAさんが忙しそうな場合、ペアのAさんの発表の原稿を作る”“ペアのAさんの進捗状況を想像しながら発表の準備をする”という2項目からなる相手補助の3因子が抽出された⁶。

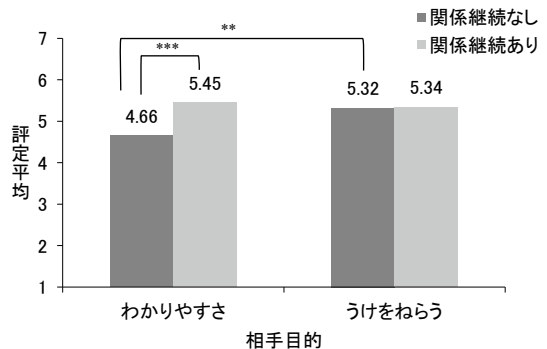
各因子に負荷が高かった項目の合計平均に対し、2（自分目的）×2（相手目的）×2（関係継続）の分散分析を行ったところ、論文読解得点において、関係継続の主効果が認められた（ $F(1,115)=4.60, p=.034, \eta_p^2=.038$ ）。関係が継続する場合（ $M=5.41, SD=.94$ ）は関係が継続しない場合（ $M=4.96, SD=.99$ ）よりも、協調意図が高かった。

また、相手目的×関係継続の交互作用効果（ $F(1,115)=5.82, p=.017, \eta_p^2=.048$ ）が認められた。この交互作用効果について検討するため単純主効果の検定を行ったところ、相手の課題目的が“わかりやすさ”であると、関係が継続する場合（ $M=5.45, SD=1.13$ ）は関係が継続しない場合（ $M=4.66, SD=1.05$ ）よりも協調意図が高かった（ $F(1,115)=11.72, p<.001, \eta_p^2=.092$ ）。他方、相手の

課題目的が“うけをねらう”であると関係が継続しない場合（ $M=5.32, SD=.79$ ）と関係が継続する場合（ $M=5.34, SD=.67$ ）とでは協調意図には差が見られなかった（ $F(1,115)=.01, ns$ ）。関係が継続しないときには、相手の課題目的が“わかりやすさ”である場合（ $M=4.66, SD=1.05$ ）よりも“うけをねらう”ことである場合（ $M=5.32, SD=.79$ ）に協調意図が高かった（ $F(1,115)=7.92, p=.003, \eta_p^2=.064$ ）。他方、関係が継続するときには、相手の課題目的が“わかりやすさ”である場合（ $M=5.45, SD=1.13$ ）と“うけをねらう”である場合（ $M=5.34, SD=.67$ ）とでは協調意図に差が見られなかった（ $F(1,115)=.18, ns$ ）。各条件における論文読解得点の平均値をFigure 1に示す。

発表準備得点においては、自分目的の主効果が認められた（ $F(1,115)=5.68, p=.019, \eta_p^2=.047$ ）。自分の課題目的が“うけをねらう”である場合（ $M=4.55, SD=1.25$ ），“わかりやすさ”である場合（ $M=4.06, SD=1.27$ ）よりも協調意図が高かった（ $F(1,115)=5.68, p=.019, \eta_p^2=.047$ ）。また、関係継続の主効果に有意な傾向が認められた（ $F(1,115)=3.58, p=.061, \eta_p^2=.030$ ）。関係が継続しない場合（ $M=4.46, SD=1.18$ ）の方が継続する場合（ $M=4.15, SD=1.38$ ）よりも協調意図が高い傾向が見られた。さらに、自分目的×関係継続の交互作用効果（ $F(1,115)=15.32, p<.001, \eta_p^2=.118$ ）、自分目的×相手目的×関係継続の交互作用効果（ $F(1,115)=5.87,$

Figure 1
各条件の論文読解得点（事前準備段階）



注) 相手目的×関係継続の交互作用効果

** $p<.01$, *** $p<.001$

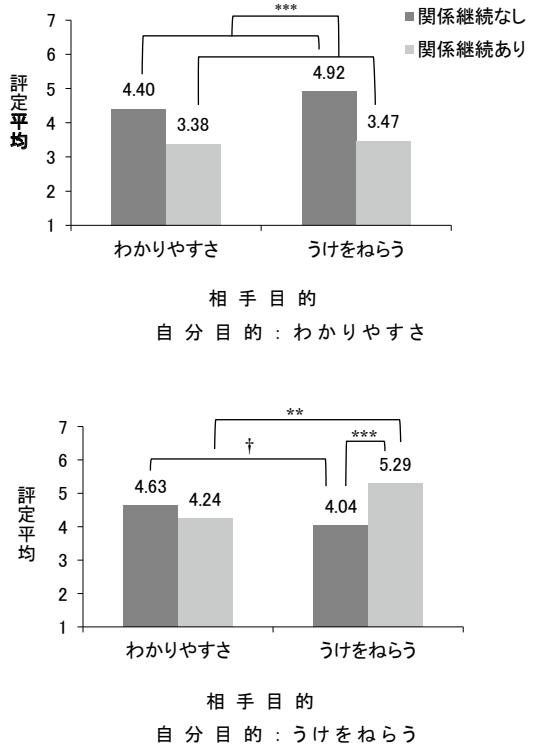
6 固有値の変化は3.55, 2.02, 1.01...というものであり、累積寄与率は62.75%であった。なお、各因子の信頼性係数を確認したところ、論文読解4項目（ $\alpha=.75$ ）、発表準備3項目（ $\alpha=.80$ ）、相手補助2項目（ $\alpha=.94$ ）であった。

$p=.017, \eta_p^2=.049$) が認められた。この3要因の交互作用効果について検討したところ、自分の課題目的が“わかりやすさ”である場合には、関係継続の主効果のみ認められ ($F(1,115)=15.35, p<.001, \eta_p^2=.118$)、関係が継続しない場合 ($M=4.60, SD=.92$) の方が継続する場合 ($M=3.41, SD=1.34$) よりも協調意図が高かった。

他方、自分の課題目的が“うけをねらう”場合には、相手目的×関係継続の単純交互作用効果が有意であった ($F(1,115)=8.25, p=.002, \eta_p^2=.067$)。この効果について検討したところ、相手の課題目的が自分とは異なり“わかりやすさ”であると、関係が継続しない場合 ($M=4.63, SD=1.18$) と継続する場合 ($M=4.24, SD=1.01$) とでは協調意図に差がなかった ($F(1,115)=.90, ns$)。他方、相手の課題目的が自分と同様に“うけをねらう”であると、関係が継続する場合 ($M=5.29, SD=.83$) は継続しない場合 ($M=4.04, SD=1.50$) よりも協調意図が高かった ($F(1,115)=9.94, p=.001, \eta_p^2=.080$)。関係が継続しないときには、相手の課題目的が自分と異なり“わかりやすさ”である場合 ($M=4.63, SD=1.18$) には、自分と同様に“うけをねらう”である場合 ($M=4.04, SD=1.50$) よりも協調意図が高い傾向が認められた ($F(1,115)=2.36, p=.08, \eta_p^2=.020$)。関係が継続するときには、相手の課題目的が自分と異なり“わかりやすさ”である場合 ($M=4.24, SD=1.01$) よりも、自分と同様に“うけをねらう”ことである場合 ($M=5.29, SD=.83$) に協調意図が高かった ($F(1,115)=6.18, p=.007, \eta_p^2=.051$)。各条件における発表準備得点の平均値を Figure 2 に示す。

相手補助得点においては、自分目的の主効果に有意な傾向が認められた ($F(1,115)=2.83, p=.095, \eta_p^2=.024$)。自分の課題目的が“わかりやすさ”である場合 ($M=3.55, SD=1.55$)、 “うけをねらう”である場合 ($M=3.98, SD=1.38$) よりも協調意図が低い傾向が見られた。関係継続の主効果にも有意な傾向が認められた ($F(1,115)=3.67, p=.058, \eta_p^2=.031$)。関係が継続する場合 ($M=4.03, SD=1.51$) は継続しない場合 ($M=3.58, SD=1.41$) よりも協調意図が高い傾向が見られた。その他の効果

Figure 2
各条件の発表準備得点 (事前準備段階)



注) 自分目的×相手目的×関係継続の交互作用効果
† $p<.10, **p<.01, ***p<.001$

は有意ではなかった。

相互作用段階協調意図

相互作用段階における協調意図をたずねた4項目 ($\alpha=.694$) の合計平均に対し2 (自分目的) × 2 (相手目的) × 2 (関係継続) の分散分析を行ったところ、自分目的×関係継続の交互作用効果 ($F(1,115)=4.44, p=.037, \eta_p^2=.037$) が有意であった。この交互作用効果について検討するため単純主効果の検定を行ったところ、自分の課題目的が“わかりやすさ”であると、関係が継続しない場合 ($M=5.08, SD=.79$) と継続する場合 ($M=4.81, SD=.92$) とでは協調意図に差がなかった ($F(1,115)=1.34, p=.175, ns$)。他方、自分の課題目的が“うけをねらう”であると、関係が継続しない場合 ($M=5.01, SD=1.03$) よりも継続する場合

($M=5.47, SD=.79$) に協調意図が高かった ($F(1,115)=4.27, p=.023, \eta_p^2=.036$)。関係が継続しないとき、自分の課題目的が“わかりやすさ”である場合 ($M=5.08, SD=.79$) と“うけをねらう”ことである場合 ($M=5.01, SD=1.03$) では協調意図に差がなかった ($F(1,115)=.07, ns$)。他方、関係が継続するとき、自分の課題目的が“わかりやすさ”である場合 ($M=4.81, SD=.92$) よりも“うけをねらう”である場合 ($M=5.47, SD=.79$) に協調意図が高かった ($F(1,115)=7.69, p=.003, \eta_p^2=.063$)。各条件における発表準備得点の平均値を Figure 3 に示す。

また相手目的×関係継続の交互作用効果 ($F(1,115)=3.10, p=.081, \eta_p^2=.026$) に有意な傾向が認められた。この交互作用効果について検討するため単純主効果の検定を行ったところ、相手の課題目的が“わかりやすさ”であると、関係が継続しない場合 ($M=5.19, SD=.87$) と継続する場合 ($M=4.98, SD=1.07$) とでは協調意図に差がなかった ($F(1,115)=0.89, p=.269, ns$)。他方、相手の課題目的が“うけをねらう”ことであると、関係が継続しない場合 ($M=4.87, SD=.97$) よりも継続する場合 ($M=5.37, SD=.64$) に協調意図が高かった ($F(1,115)=4.41, p=.021, \eta_p^2=.037$)。関係が継続しないとき、相手の課題目的が“わかりやすさ”である場合 ($M=5.19, SD=.87$) には“うけをねらう”ことである場合 ($M=4.87, SD=.97$) よりも協

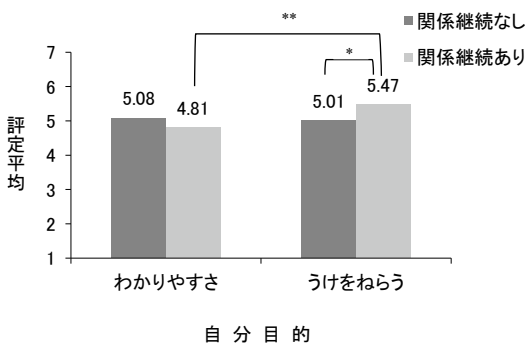
調意図が高い傾向が認められた ($F(1,115)=2.19, p=.090, \eta_p^2=.019$)。関係が継続するとき、相手の課題目的が“わかりやすさ”である場合 ($M=4.98, SD=1.07$) よりも“うけをねらう”ことである場合 ($M=5.37, SD=.64$) に協調意図が高い傾向が認められた ($F(1,115)=2.59, p=.060, \eta_p^2=.022$)。各条件における発表準備得点の平均値を Figure 4 に示す。その他の効果は有意ではなかった。

考察

準備段階における協調意図

本研究ではチームで課題を行う場面を取り上げ、課題目的が共有されているときに協調意図が高くなることに関して検討した。またその効果がチームとしての関係継続性が高い場合に大きいことについても検討した。その結果、チームで“うけをねらう”という課題目的が共有され、今後も関係が継続される場合に、事前の発表準備における協調意図が高かった。これは予測と一貫する結果であった。他方、“わかりやすさ”という目的が共有されている場合には上記の結果は認められなかった。なお事前の準備である論文の読解に関しては、関係が継続しない場合にも相手が課題に対し“うけをねらう”目的を持つ場合には協調意図が高かった。相手の状況を考慮し補助するための準備に関しては、自分が課題に対し“うけをね

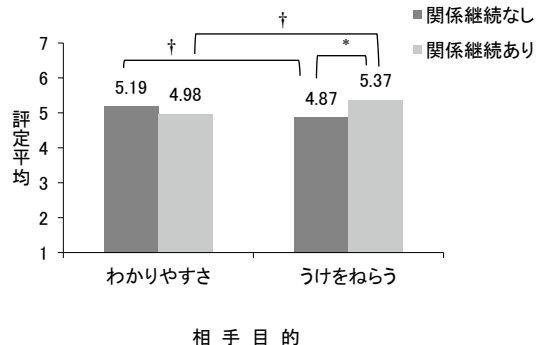
Figure 3
各条件の発表準備得点（相互作用段階）



注) 自分目的×関係継続の交互作用効果

* $p<.05$, ** $p<.01$

Figure 4
各条件の発表準備得点（相互作用段階）



注) 相手目的×関係継続の交互作用効果

† $p<.10$, * $p<.05$

らう”目的を持つ場合、また関係が継続する場合に協調意図が高かった。

相互作用段階における協調意図

相互作用段階における協調意図においては、自分が課題に対し“うけをねらう”目的を持ち、相手との関係が継続する場合に協調意図が高かった。また相手が課題に対し“うけをねらう”目的を持ち、関係が継続する場合にも協調意図が高かった。ただし、予測していた課題目的の共有による効果は認められなかった。

課題目的の達成難易度による影響の可能性

上記の通り一部の指標においてのみ予測と一致する結果が見られた理由として、研究で取り上げた課題目的が影響した可能性がある。発表において“うけをねらう”ためには、前提として内容が“わかりやすい”必要があるかもしれない。もしそうであるとすれば“うけをねらう”課題目的の達成のためには、メンバーそれぞれによる十分な準備とメンバー間での調整などが必要と考えられる。そのため“わかりやすさ”を目的とする場合よりも、“うけをねらう”を目的とする場合の方が、課題目的の共有がより重要となる可能性がある。実際に予備調査2においては、各項目がゼミ発表に対する自分の考えにどの程度あてはまるか参加者にたずねたが、“うけをねらう”ことに対してはあてはまりの程度が低く回答されていた。ゼミ発表の成功という目標に対して“うけをねらう”という課題目的を持つことが、本実験の参加者にとって一般的なものではなく、達成することが難しい目的であると知覚された可能性がある。

本研究では、目的の共有のされやすさによって効果に影響が見られるかどうか探索的に検討するため、予備調査2においてあてはまりの程度に相違が見られる二つの課題目的を選定した。今後は、課題目的の達成難易度や課題目的共有の重要度を統制して検討する必要性、あるいは達成難易度や共有の重要度を実験的に操作し、上記の解釈可能性について検討する必要があるだろう。

今後の課題

上記に挙げた点以外にも、今後検討すべき課題として次の3点がある。

第一に、チームとしての関係継続が課題目的共有の効果进行调整するプロセスの検討である。本研究の問題点として、関係継続性操作方法の適切性が挙げられる。関係継続なし条件では参加者に相手とのチーム活動が“今回だけである”という状況を想像させたが、関係継続あり条件には“相手と仲良くしたいと考えている”ことを想像させた。後者ではチームとしての関係継続ではなく、人間関係の継続が操作されていた可能性がある。そのため今後は“次回のゼミ課題でも同じチームで活動する”と伝えることで、チームとしての関係継続性を操作し、本研究と同様の結果が認められるのか追試する必要がある。また、他の操作や文脈を用いて検討する必要もあるだろう。具体的には、複数回のチームビルディングのある状況を用いた関係継続性の操作が可能と思われる。

第二に、本研究知見の頑健性に関し実際に作成されたチームを用いた実験的検討である。本研究ではシナリオを用いてそこに説明された状況を参加者に想像してもらい、その状況での協調意図について回答を求めた。操作チェック項目への回答により、参加者は各条件において説明された状況を正しく理解できていたことが確認されていたものの、この結果は、必ずしも参加者が状況を十分に想像できていたことを意味するわけではない。この問題は、シナリオに関する想像しやすさを質問項目でたずねたとしても完全に解決するものではなく、場面想定法を用いる実験に共通するものである。この点を踏まえ、今後は実際に参加者どうしを組み合わせたチームを用いて実験実施し、研究結果の再現性を検討する必要があると考えられる。

第三に、チームメンバーとの協調に対する行動レベルの検討である。本研究では相手との協調意図を測定したが、今後は行動のレベルで相手との協調を測定すること、さらにチームのパフォーマンスも測定し、協調意図との関連について検討する必要があるだろう。

なお、本研究ではメンバーの協調意図に対する課題目的の共有の効果を検討するため、リーダーを持たないチームを取り上げ、リーダーから課題目的が教示されない状況を用いた。そのため、研究で得られた知見がこのような状況に限定されることには注意が必要である。

本研究の意義と研究の展望

上述のとおり本研究には検討すべき課題はあるものの、これまであまり検討されてこなかった“課題目的の共有”という概念を扱った点は、本研究の意義と言えるだろう。また課題目的の共有が協調意図に及ぼす因果関係を検討した点、チーム課題の達成に向けた各メンバーの準備段階にも焦点を当て協調意図が高くなる状況を明らかにしようとした点も同様である。

研究の展望として次の2点が上げられる。第一に研究で想定するプロセスに対する詳細な検討である。本研究では、課題目的がチームメンバーに共有されていることが協調意図を高めると予測し実証的に検討した。その結果、一部の指標においてはあるものの、関係が継続する場合には予測した効果が認められた。ただしそのメカニズムに対する検討は十分とは言えない。課題目的が共有されているということは、課題に対する解釈や達成アプローチに関するメンバー間の類似性を知覚させるかもしれない。もしそうであるならば、類似性を持つメンバーと今後も同じチームとして活動することが予測されると、直面している課題へのモチベーションが高まる可能性がある。あるいはメンバーに対し協調する行為を示すことで、今後も同じチームとして活動する相手からの好意を得ようとする可能性もある。いずれのプロセスが生じるのか、もしくは両方のプロセスが働くのか、そのメカニズムについて検討することが今後の展望の一つであり、認知や態度の共有に関する研究領域への学術的貢献につながると考えられる。

第二に社会的意義を持つ研究の推進である。たとえば現実社会においては、プロジェクトが終わるとチームが解散するといったような短期間プロ

ジェクトが実施される場合も多い。こうした場合にも課題目的の共有がどのような役割を果たすのか明らかにすることなど、実践的・応用的な取り組みが重要と思われる。

引用文献

- 秋保亮太・縄田健悟・池田浩・山口裕幸 (2018). チームの振り返りで促進される暗黙の協調—協調課題による実験的検討— 社会心理学研究, 34(2), 67-77. <https://doi.org/10.14966/jssp.1705>
- 秋保亮太・縄田健悟・中里陽子・菊地梓・長池和代・山口裕幸 (2016). メンタルモデルを共有しているチームは対話せずとも成果を挙げる—共有メンタルモデルとチーム・ダイアログがチーム・パフォーマンスへ及ぼす効果— 実験社会心理学研究, 55(2), 101-109. <https://doi.org/10.2130/jjesp.1503>
- DeChurch, L. A., & Mesmer-Magnus, J. R. (2010). The cognitive underpinnings of effective teamwork: A meta-analysis. *Journal of Applied Psychology*, 95(1), 32-53. <https://doi.org/10.1037/a0017328>
- 池田浩 (2012). チーム・メンタルモデルおよびチーム・パフォーマンスを規定する要因に関する検討—チーム力およびチーム・リーダーシップの効果— 福岡大学人文論叢 44(2), 293-309.
- Kozlowski, S. W. J., & Ilgen, D. R. (2006). Enhancing the effectiveness of work groups and teams. *Psychological Science in the Public Interest*, 7(3), 77-124. <https://doi.org/10.1111/j.1529-1006.2006.00030.x>
- Marks, M. A., Mathieu, J. E., & Zaccaro, J. (2001). A temporally based framework and taxonomy of team processes. *Academy of Management Review*, 26(3), 356-376. <https://doi.org/10.2307/259182>
- Mathieu, J. E., Heffner, T. S., Goodwin, G. F., Salas, E., & Cannon-Bowers, J. A. (2000). The influence of shared mental models on team process and performance. *Journal of Applied Psychology*, 85(2), 273-283. <https://doi.org/10.1037/0021-9010.85.2.273>
- 田中知恵 (2023). 課題目的の共有と関係継続性が協調意図に及ぼす影響 [口頭発表]. 産業・組織心理学会第38回大会, 静岡県立大学.
- 山口裕幸 (2020). チームワークの光と影 心理学評論, 63(4), 438-452. https://doi.org/10.24602/sjpr.63.4_438

付録

実験で用いたシナリオ

あなたは大学のゼミで、同じゼミ生 A さんと 2 人 1 組ペアを作り、1 か月後論文の発表をすることになりました。

関係継続あり条件

あなたはペア相手の A さんに対して、ゼミの中でこれからも仲良くしたいと考えています。

関係継続なし条件

あなたとペア相手の A さんはたまたま席が隣で、あなたがペア相手の A さんと一緒に活動をするのは今回だけです。

自分目的わかりやすさ条件

あなたは、前の週のグループがわかりやすい発表であったため、自分たちのグループもわかりやすさを大事にした発表にしようと思っています。

自分目的うけをねらう条件

あなたは、前の週のグループが受けをねらったおもしろい発表であったため、自分たちのグループもうけをねらうことを大事にした発表にしようと思っています。

A さんと挨拶をした後、以下のことを言われました。

相手目的わかりやすさ条件

ペアの A さん「授業の発表ではみんなに理解してもらえるようにわかりやすさを大事にしたいんだよね。」

相手目的うけをねらう条件

ペアの A さん「授業の発表ではみんなにおもしろい発表だと思って欲しいからうけをねらうことを大事にしたいんだよね。」

ただし、発表準備の段階においてまだ SNS などの連絡先の交換は行っていないため、各自の作業となり 1 週間に 1 回のゼミの授業内で話し合うこととします。

Effects of sharing project's purpose and relationship continuity on cooperative intentions:

A study using scenario of pair work

Tomoe Tanaka
(Faculty of Psychology, Meiji Gakuin University)

Abstract

Effects of sharing project's purpose and relationship continuity as a team on cooperative intentions were examined. In the experiment, undergraduates ($n=123$) were instructed to imagine the situation in which they would make a presentation in pairs as part of a class assignment. Their own purpose for the presentation (easy-to-understand/hit-driven) and the other's purpose (easy-to-understand/hit-driven), and the relationship continuity as a team were manipulated using a scenario. The cooperative intentions in the preparation stage (e.g., rehearsing the presentation independently) and cooperative intentions in the interaction stage (e.g., thinking about what they can do if their plans don't go well) were measured. Results suggested that when participants shared the purpose of "hit-driven" in the continuing condition, the levels of cooperative intentions in preparing materials were high compared to other conditions. The possibility of improving cooperation among members was discussed as the significance of sharing project's purpose.

Keywords: sharing project's purpose, relationship continuity, cooperative intentions